**聞いて、見て、泊まる（メノー）―年間第2主日Ｂ年**

ヨハネ・ボスコ　林　大樹

**ヨハネによる福音1章35－42節**

**第一段落（35－39節）**

洗礼者ヨハネは、近づいてくるイエスを見て、「見よ、神の小羊だ」と二人の弟子に紹介します（36節）。この表現には次のような解釈があります。

1. イザヤ書53章の、人々に平和と癒し（いやし）をもたらすために人々の罪を背負って死ぬ「苦しむ僕」と結びつける解釈。イザヤ書53章7節では「屠り場（ほふりぼ）に引かれる小羊」にこの僕が譬えられています。
2. 「過越（すぎこし）の小羊」と結びつける解釈。ヨハネ福音書では、イエスの死は過越の小羊が神殿で屠られる（ほふられる）時に起こったとされ、過越の小羊の骨が一本も折られてはならなかったように、イエスの骨も折られなかったとされています（ヨハネ19章36節）。イエスは過越の小羊であり、その死と復活はユダヤ教の過越祭に取って代わる出来事なのです。
3. 「黙示的小羊」との関連を主張する説。ユダヤ教の黙示文学には、最後の裁きの日に現れ、世の悪を駆逐（くちく）する羊が登場します（十二族長の遺訓ヨセフの19：8など）。これがイエスに当てはめられ、イエスは「神の小羊」と呼ばれました。

これらの解釈にはそれぞれに難点があって、一つの解釈に絞ることは難しいことです。洗礼者ヨハネはこのいずれをも思い起こしながら、イエスを「神の小羊」と呼んだのかも知れません。

弟子たちがイエスに従ったのは、彼らがイエスを見たからではなく、「聞いた」（37節）

からです。イエスとの出会いの始まりは「聞く」ことです。聞いて従うことによって、

イエスの泊まっている場所を「見る」（39節）のです。

ヨハネの言葉を聞いてイエスの後を追う彼らを見て、イエスは「何を求めているのか」と尋ねます（38節）。これは挨拶代わりの平凡な言葉ではないかも知れません。「求める」と訳された動詞は、イエスを「見ようとした」（3節）ザアカイと「失われたものを捜して救うために来た」（10節）イエスとの出会いを描くルカ19章1－10節では、傍線部に使われています。とすると、イエスが「何を求めているのか」と尋ねたのは、弟子が何を求めているのか自覚していなければ、イエスとの出会いに救いは生じないからです。

弟子たちはそれに応じて「どこに泊まっておられるのですか」（38節）と尋ねますが、ここで「泊まる」と訳された動詞はメノー（存続する・留まる・滞在する）です。メノーは新約聖書全体で118回使われますが、そのうち40回がヨハネ福音書の用例です。例えば、

イエスが「私のうちにいる（メノー）父」と述べるときはイエスと神との特別な関係を表し、「私はぶどうの木、あなたがたも、私につながって（メノー）いなければ、実を結ぶことができない」（ヨハネ15章）と諭すときは、キリスト者とイエスとの深い交わりを表しています。

イエスは二人に「来なさい。そうすれば分かる（直訳では見る）」と言います（39節）。その言葉に従って二人が「見た」ものは、もはや宿泊場所ではなく、イエスが「つながり、留まっている」ところです。それは父である神との交わりそのものです。彼らは、イエスと一緒にそこに「泊まる（メノー）」ことにより、洗礼者ヨハネが「神の小羊」と証しした

イエスがどのような方であるか、身をもって体験したのです。その体験から弟子たちの新しい歩みが始まります。

**第二段落（40－42節）**

この「留まる（メノー）」という体験によって二人は「神の小羊」に出会います。「何を求めているのか」に気づき、それを知った者が、喜びを分かち合うために外へ出て行きます。

アンデレはまず兄弟シモンを捜し（直訳　見つける）、彼は「メシアと出会った」（直訳

メシアを見つけた）と伝え（41節）、彼をイエスのもとに導きます（42節）。シモンもまた、イエスを見て、従ったのではありません。「メシアを見つけた」というアンデレの言葉を聞いて従い、弟子としての新しい歩みが始まります。イエスはシモンを見つめて、彼に「ケファ」、つまりペトロ（岩）という名を与えます（42節）。この改名は、果たすべき新たな使命が当人に与えられたことを表しています。弟子とはイエスに留まり、彼から新たな名前（霊名）を受け、新しい使命が与えられた者なのです。

**今日の福音のまとめ**

今日は、典礼暦の上では年間第2主日です。「年間」には、途中、四旬節や復活節が入りますが、「年間」最後の主日「王であるキリスト」までの34週は「キリストの神秘全体を追憶するもの」です。その始まりの今日、弟子たちの召命の神秘を追憶します。

今日の福音は二つの段落に分けることができます。第一段落の35－39節では、洗礼者ヨハネの弟子だった二人がイエスのもとに「泊まる（メノー）」までの過程を述べています。38節、39節には「泊まる（メノー）」という語が三回も使われ、キーワードとなっています。この「泊まる（メノー）」の体験こそが、第二段落の40－42節において他の人をイエスのもとに導く原動力となっています。今日の福音には、人がどのようにしてイエスに従う者になるのか（＝召命）が描かれています。「聞いて、見て、泊まる（メノー）」ことによって、イエスに従い、イエスを証しする者へと変えられるのです。

アンデレはシモンに「私たちはメシアと出会った」（41節）と告げます。ここでの「私たち」は、時代を越え、現代に生きる私たちもこの「私たち」に重なり、イエスに留まり（メノー）、「メシアと出会った」と外に向かって告げるのです。

2021年1月17日（日）　金沢教会　主日ミサ　説教